

書 評

清水長正・澤田結基編『日本の風穴』

古今書院, 2015年発行, A5判, 283ページ,
ISBN978-4-7722-6116-6, 5,500円+税.

“風穴”という言葉はこれまでも耳にすることはあり、そのメカニズムや利用に関しても漠然と理解していた。しかし本書に接し、“風穴”の分布の広さや詳細なメカニズム、利用の変遷、そして保護への取り組みなど、多様な観点から改めて“風穴”を認識した。編者の一人である清水長正氏は、この風穴に入れ込み、風穴を求めて全国を歩き回る一方、文献を通して風穴の歴史を紐解いている。清水氏ともう一人の編者である澤田結基氏は、自然地理学を出発点として寒冷地の地形現象を研究してきたが、“風穴”もその延長線上に位置づけられる。しかし、風穴は単なる自然現象としてのみ認識されてきたのではなく、蚕種などの貯蔵倉庫として各地域の産業や文化と密接に結びついた存在であった。しかし、その隆盛期も大正期までであり、その後は風穴利用も急速に衰退し、朽ち果てた風穴も少なくはなかったようである。その風穴に光を当て、新たな観点から風穴を再認識する地道な活動が各地で続けられていた。その活動が、ついに2014年8月30日に「第1回風穴小屋サミット」(長野県大町市)として花開き、そして本書の企画へとつながったことである。したがって、本書はこのサミットに参集した多種多様な風穴愛好家38名により執筆されたものである。

本書は、まず「日本の風穴分布」の概観から始まり、「巻頭インタビュー風穴の現代的意義 — 市川健夫先生に聞く」とへ続く。ここでは、昭和30年代から信州を中心に風穴調査を続けてこられた市川先生が風穴との出会いや養蚕全盛期の風穴の役割、風穴の歴史、そして現代における風穴の意義などについて語られている。

本編は、「第I部 風穴とは(第1～2章)」、「第II部 風穴調査最前線(第3～13章)」、「第III部 各地の風穴だより」、「第IV部 風穴へのとりくみ(第14～20章)」の4部から構成され、巻末資料として「風穴にかかわる文献」、「全国風穴小屋一覧表」と「自然状態(未利用)の風穴一覧表」が掲載されている。

第I部の第1章は、本書のダイジェスト的な構成になっており、風穴の全体像を把握するうえで大変役に立つ。最初に風穴の概念や定義について触れられており、本書では、夏に10℃以下の低温条件を伴う風穴を主な対象としている。その中でとくに、日本国内に多い崖錐に生じる風穴に対し、地形的成因から「崖錐型風穴」という用語の使用を推奨している。第2章では風穴のしくみについて論じられている。本章の筆者

である澤田結基氏は、大学院生時代から大雪山国立公園内の然別火山群西ヌブカウシヌブリ熔岩ドームの岩塊斜面に形成された風穴で研究を続けており、まさに風穴にはまりこんでしまった研究者の一人である。本章では、その成果が図や写真を交えてわかりやすく解説されている。風穴というと、一般には冷気の吹き出しをイメージするが、冬季の積雪下から噴き出す「温風穴」の記述は興味深い。また、風穴内の氷の形成が厳冬期ではなく、融雪期の4月から始まり7月まで継続するという理屈の説明もわかりやすく、思わずなるほどと感心してしまう。

第II部は、本書の中核をなす部分であり、それぞれの風穴研究者の専門的観点から研究成果が紹介されている。まず第3章から第5章は、歴史や文化、産業の観点から風穴が論じられている。第3章では、明治から大正にかけて養蚕業の発展に果たした風穴の役割とその一方で急速に衰退した風穴利用の時代的背景が紹介されている。その風穴が、最近になって研究という限定された状況ではあるが、筆者らにより蚕種冷蔵用として復活したとのことである。風穴利用の科学的解明が待たれる。第4章と第5章では、養蚕業が国策として近代産業に成長していく過程で、風穴小屋にも国や県による規制がかけられていく経緯が綴られている。次に、第6章から第11章では、秋田県大館の風穴、北海道置戸の鹿ノ子風穴、群馬県草津の氷谷風穴、富士山麓の富士風穴、長野県松本市稲核の風穴本元、鬼押出し熔岩の風穴群について、風穴のメカニズムや氷体の形成、湧水温との関係などが論じられている。この点では、第2章の風穴のしくみと重複する部分もあるが、それぞれの筆者が風穴を調べるようになったきっかけやそれぞれの地域での風穴の役割、風穴の立地環境などについても述べられている。これらの記述から各筆者の風穴への想い入れなどが伝わってくる。第12章と第13章では、植生や植物の観点から、風穴が取り上げられている。第12章の筆者である佐藤謙氏は、北海道の高山植物の第一人者である。まさに風穴は、その高山植物が出現する場所であり、本章では北海道内各地の風穴植生が紹介されている。このような風穴植生は氷期の遺存植生であり、隔離分布していることから、分子系統地理学の対象であるという筆者の指摘は、今後の風穴研究の発展性を示唆するものである。第13章では、環境省の第4次レッドリストに指定されているエゾヒョウタンボクのうち、東北地方に分布するものの生育地として冷涼な風穴環境との関わりが指摘されている。ただし、その分布地が12箇所限られている理由は、どこにあるのだろうか。

第III部は、各地の風穴の紹介である。北海道から東

北地方、中部日本を中心に16ヶ所の風穴が取り上げられている。本部の筆者は、役場や博物館の職員、自然観察指導員、風穴地主、地域研究者、地元の風穴同好者、地元の自然友の会会員、ジオパーク協議会事務局職員、風穴研究者など、実に多彩である。各風穴の特徴や見どころ、その風穴の歴史や由来など、あるいは地元の方々ならではの話題などが、写真や図とともに簡潔にまとめられている。しかも、2万5千分の1地形図の上に風穴の位置が示されていることから、風穴巡りのガイドブックとしても活用できる。できれば、別冊付録となっていれば携帯には便利であったのだが……。いずれ“全国風穴ガイド”などとして登場することを期待したい。

第IV部では、新たな視点からの風穴利用について紹介されている。かつて日本の養蚕業を支えてきた風穴はその役割を終え、やがて忘れ去られ荒廃していった。その風穴を再び蘇らせ、新たな活用がいくつかの風穴で試みられている。第14章で紹介されている荒船風穴は、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の構成要素として世界遺産に登録された風穴である。養蚕業を支えてきた全国の風穴代表としての重責を担っている。実用的な活用例として紹介されているのが、鷹狩風穴（第15章）と荒島風穴（第16章）である。鷹狩風穴では

風穴小屋を復元し、焼酎や日本酒の熟成に利用されている。荒島風穴でも食品の貯蔵、熟成用としての利用が試みられているが、現在は試行錯誤の段階のようである。一方、滝谷風穴（第17章）や長走風穴（第18章）では、地域活性化のために風穴利用委員会が設置されたり、博物館的な位置づけとして学校の郷土教育に活用されたりと、文化的側面から風穴の活用が考えられている。最後の第20章では、第1回風穴小屋サミットが開催されるに至った経緯やその意義が語られるとともに、風穴や風穴小屋の復元とその利活用を通じた地方創成への期待も表明されている。

以上、20章の本編以外に8つのコラムが要所に配置され、本編の補足的な役割を果たしている。編者は、「あとがき」において、本書が“日本の風穴に関するエンサイクロペディアを目指した本”であることを明かしているが、本書に込められた編者の意志は、その内容から大いに察することができる。本書を通読して、“風穴”とは単に冷気が吹き出しているところではないということを十分に認識するとともに、本書に関わった方々の風穴や風穴小屋に対する思い入れの強さを、改めて感じる事ができた。

（高橋 伸幸）